

大安寺報



名句・名言に学ぶ

谷川俊太郎 (詩人)
人と出会ったおかげで、自分とも出会えた。

私たち人間が、必ずといっていいほど直面する問いがあります。それは、「自分は何のために生まれたんだろう?」という問いです。

少年期に生まれるその小さな問いは、ある人にとっては青年期にその問いは大きくなり、ある人にとっては生涯を通じての大きな問いともなります。そしてまた、その問いの答えは、容易には見つかりません。何故なら、人はそもそも「生きるために生まれた」からです。

人間以外の多くの生物は、「何のために生まれたのか?」という悩みは抱えません。何故なら、そのことに疑問に持つ能力がないからです。他の生物は、私たちの種・子孫を残すことを目的に、ただ「生きていく」からこそ悩むことがないのです。知能を持つことのできた半面、私たちは他の生物であれば悩まなくても済むことを、悩む宿命を与えられたという事です。

そしてまた、私たちは、自分自身で自分自身のことばかりしません。何故なら、私たちは「縁起なる」(相互依存関係に

ある) 存在だからです。何より、私たちは独立自尊ではられません。それぞれは生存は、周りの人たちのおかげで守られ、氏名、肩書、職業などもすべて他の人から与えられた属性(その事物が持っている性質)です。お釈迦様がお悟りの際に「我と大地有情(自然・生物)共に同時成道す」とおっしゃったのは、お釈迦様自身が縁起なる存在であることをお悟りになったからです。冒頭の谷川俊太郎さんの言葉は、お釈迦様のこの感慨にも通じるように思うのです。

私たちは、両親がいたから生まれ、生まれてから多くの人たちと縁を結ぶことによつて、私たち自身の人格が作られ、また、人との出会いを通して、自分自身の新たな面に気づき、悪い面を改め、良い面を伸ばすことができます。もちろん「人」には、皆さんのご先祖様や心に思う亡き方々も含まれます。秋彼岸、今現在のみなさんを形作ってくださいた方々を思い、より良き、新しい自分と出会う契機としたいものです。

合掌



仏事

Q & A

第二十九回

Q、法事は何回忌までお勤めすればいいのですか?

A、ご先祖さまの恩に報いるために供養を続けていくわけですから、先祖供養に終わりは無いというのが本来の答えになります。ただし、実際には、三十三回忌か五十回忌で弔い上げとすることが多いものです。もちろん、菩提寺によっては、それ以降の法事を行うこともあり、百回忌、百五十回忌、何百回忌とお勤めすることもあります。「誰もそのご先祖さまの顔を知らなくなつたあたりで弔い上げをする」というような考え方もありますが、出会ったことのない、顔も知らない多くのご先祖さまのおかげで、私たちの今があります。ご先祖さまのことを直接知らなくても、ご先祖さまとしっかりつながっている証として、私たちが存在しているのです。知っている方だけを供養しても、本来の供養の意義には適いません。ご先祖さまへの感謝の気持ち、いつまでも胸に抱き続けていたいものです。

出典：「おくる」曹洞宗の葬儀と供養(編著：曹洞宗岐阜県青年会)

大安寺の宗旨：曹洞宗 本山：福井県永平寺・神奈川県總持寺 高祖：道元禪師 太祖：瑩山禪師
ご本尊：釈迦牟尼仏 本尊唱名：南無釈迦牟尼仏 (なむしゃかむにぶつ)